# Ⅲ 検 出 遺 構

今回検出した主な遺構は、西三坊大路、五条条間路、南北小路、側溝５条の条坊遺構と坪内の建物６棟、塀５条、井戸２基、土壙などである。以下、条坊遺構、建物、井戸について記述する。

## １ 条坊遺構（第３図、図版２・３）

平城京右京における条坊遺構はこれまで西隆寺、唐招提寺などで一部検出したにとどまっていたが、今回の調査で２、３の知見を得、とくに丘陵部の条坊遺構を発見したことは京条坊復原に重要なより所となろう。調査地が右京五条四坊三坪の全域を包括するため、坪の四周にトレンチを設定し、予想位置に西三坊大路、五条条間路、七坪と三坪の間の小路の痕跡を確認できた。

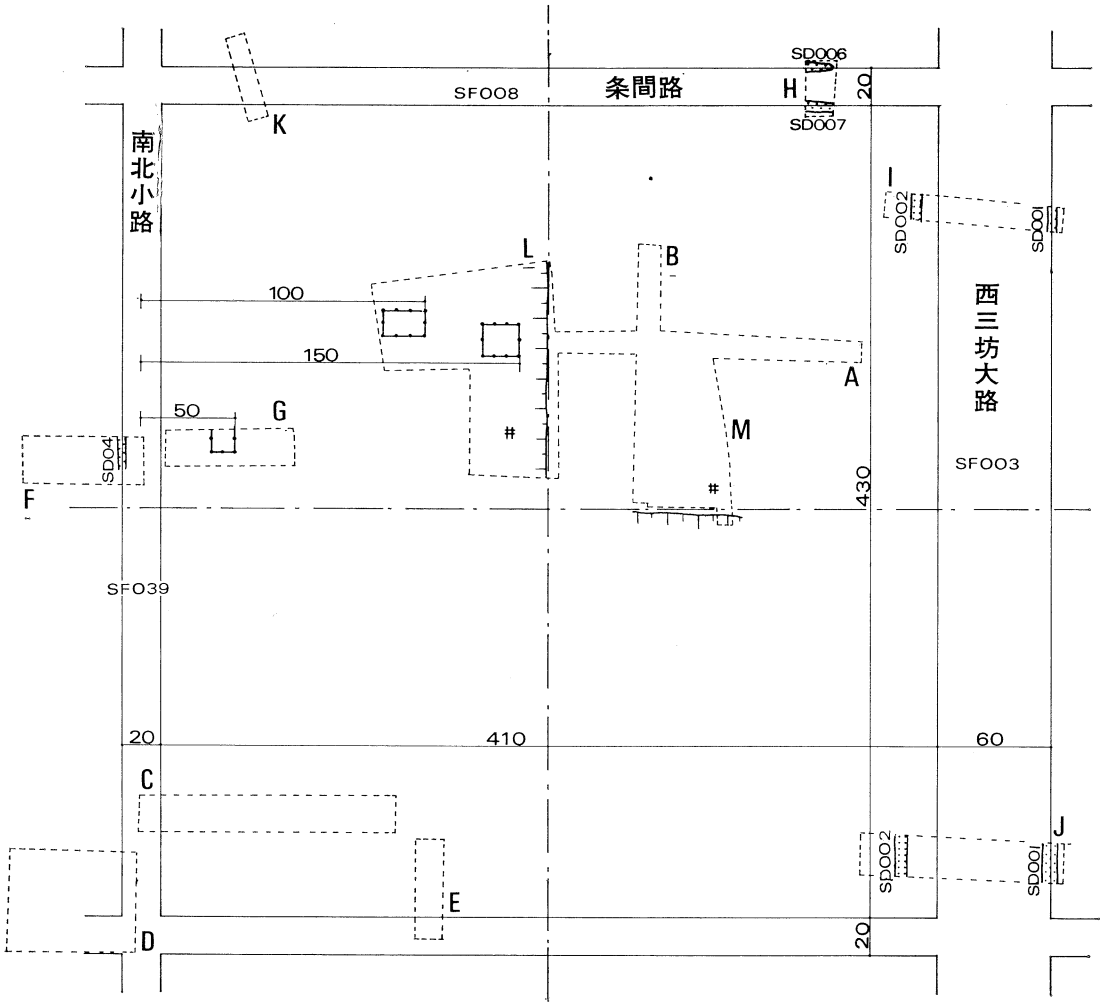
**西三坊大路ＳＦ003**　Ｉ、Ｊ両トレンチ東端に幅１～２ｍのＳＤ001 を、西端に幅1.7ｍの溝ＳＤ002 をそれぞれ検出した。両溝を大路側溝とすると、心々距離がＪトレンチ78.5尺（23.24ｍ）、Ｉトレンチで73.75尺（21.83ｍ）となり、溝心々で推定大路幅60尺より広くなる。ＳＤ001 の方位は国土基本図方眼北に対して N15′50″Ｅとなり、ＳＤ002はN1°03′21″Ｅとなる。後者の振れは大きいためしばらくおき、前者について考えてみたい。ＳＤ001 を大路東側溝と仮定して、溝心より30尺（推定大路½幅）西の位置を大路心とすると西三坊大路心から朱雀大路心までの計測値 1601.93ｍ を得る。この値を朱雀大路の調査で明らかにされた平城京の方位 N0°15′41″Wで換算（以下の数値は同様の方位で換算）すると 1600.052ｍ となり基準尺 0.296 で除すと 5405尺（≒３×1800）となり、1800尺の基本方眼地割りにほぼ一致することが明らかになった。

**条間路ＳＦ008**　Ｈトレンチで幅1.2ｍのＳＤ006と幅1.1ｍのＳＤ007の両側溝を検出した。側溝心々距離20.16尺(5.97ｍ)となり、従来検出されている小路と同じ値を示す。条間路は小路より広く4～8丈と推定されているため、今回検出の２本の溝が条間路の両側溝を示すものか今後の調査が必要であろう。この条間路心と平城宮西面南門心を計測すると 1594.643ｍを得、基準尺0.296ｍで除すと5387.3尺で、基本方眼地割り5400尺に対して12.7尺北に寄っていることが判明した（唐招提寺講堂修理の際確認の小路計算からは131.62ｍ(444.6尺)で５尺ほど北寄り)。これは施工誤差か東西軸線の振れによる影響と思われる。なお、Ｋトレンチでは両側溝とも削平されていた。

**南北小路ＳＦ039**　Ｆトレンチでみると、ＳＤ004が前述の西三坊大路心より 135.973ｍ（459.36尺）の計測値を得、坪計画寸法450尺＋10尺（小路½幅）460尺の近似値を示し、この溝に流れ込む暗渠ＳＸ041、近接して建つ建物ＳＡ042と関連して西小路西側溝と考えられる。

なお、南小路についてはＥ、Ｄ両トレンチとも、後世の攪乱のため確認出来なかった。

以上、三坪の条坊について検討したが条坊の地割痕跡が残る東、北、西については道路側溝の一部が確認出来た。これらを基に坪の中軸線を求めると第３図のように、三坪の地形の東西、南北方向に段差が出来る部分にそれぞれ中軸線が位置する。また後述するように建物の柱通りが坪計画の完数尺に位置することが判明した。これらのことから平城京周辺部に於ても、厳密な条坊制の施工、条坊内の宅地割なが行われたものと思われるが、今回の調査は一部に過ぎず、今後の調査によって更に資料が増加することが望まれる。




**第3図**　右京五条四坊三坪の占地（数値は尺）

| 地点名 | X | Y | 備考 |
|---|---|---|---|
| 朱雀大路心 | —147833.000 | —18577.850 | 「平城京朱雀大路発掘調査報告」 |
| 朱雀門心 | —145994.500 | —18586.320 | 平城宮16次調査 |
| 西面南門心 | —145753.390 | —19093.310 | 平城宮15次調査 |
| 西三坊大路心 | —147424.000 | —20179.785 | 平城宮100次調査 |
| 唐招提寺講堂東西小路 | —147218.000 | —19438.000 | 「国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書」 |
| 五条条間路心 | —147353.135 | —20208.000 | 平城宮100次調査 |
| 二条大路心 | —146018.180 | —18586.320 | 平城宮16次調査 朱雀門心より80尺南 |

**条坊関連計測座標表**

## 2 建　物（第4・5図、図版4・5）

検出した奈良時代の建物はLトレンチ3棟、Mトレンチ1棟、Gトレンチ2棟の計6棟である。他に建物に関連した塀3条がある。建物はいずれも小規模な掘立柱建物で、発掘面積に比して棟数も少ない。建物には重複関係や方位の異なるものがあり、A、Bの2時期に分れる。

A期は平城京造営方位にそったもので、SB025・027・035・SA028・029がある。

**SB025**　Lトレンチ北西部にある桁行4間（8.78m）、梁行2間（3.94m）の東西棟建物で東妻廂をもつ。西妻廂は調査地区外のため不明である。柱間は梁行が南間6尺北間7尺で、桁行が身舎7尺等間、廂の出8尺である。なお、南面中央側柱掘形に接して、墓壙SX030を検出した。

**SB027**　SB025の東側にある桁行3間（5.65m）梁行2間（4.65m）の東西棟建物である。南面東端1間に廂が取り付く。桁行は6尺等間であるが南面では廂の付く東端間をわずかに広くする。梁行は北間6尺、南間9尺、廂を5尺とする。なお、SB027の北部をL字形に画する南北2間（3.1m）東西3間（4.6m）塀SA029と南側柱の西延長線上に1間の塀SA028がある。

**SB035**　GトレンチのSB034と重複する梁行3間（4.88m）の西面廂付き南北棟建物である。桁行は南側1間分（1.83m）を検出した。柱間は桁行が6尺で、梁行が身舎6尺等間、廂4尺である。身舎の南西隅掘形の柱位置には塼が据えられていた。

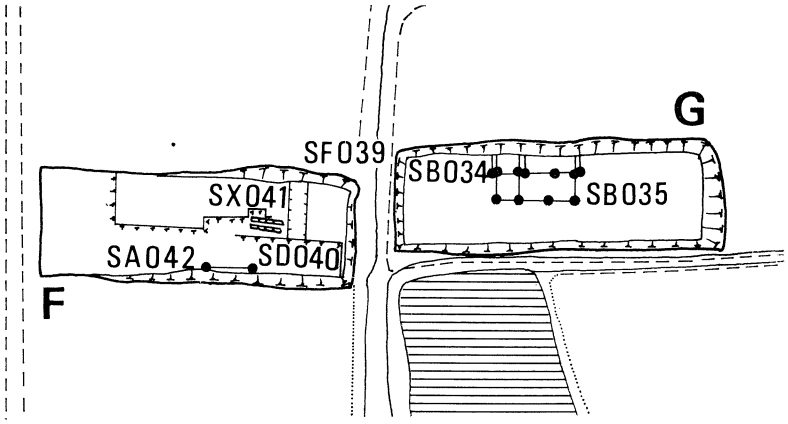
B期は平城京造営方位より北で西へ0.5−2度振れたもので、SB017・026・034・SA018がある。

**SB017**　Mトレンチ西端にある梁行2間（2.16m）の東西棟建物で、東妻側柱を検出した。梁間は9尺等間である。なお東妻側柱の南延長線上に20尺離れ南北1間（3m）の塀SA018がある。

**SB026**　SB025とSB027の間にある桁行3間（5.51m）梁行2間（3.82m）の東西棟建物である。柱間は桁行、梁行ともに6尺等間である。

**SB034**　GトレンチSB035と重複した梁行3間（4.88m）の西面廂付き南北棟建物で、南妻側柱のみを検出した。梁行は身舎が6尺等間、廂が7尺である。

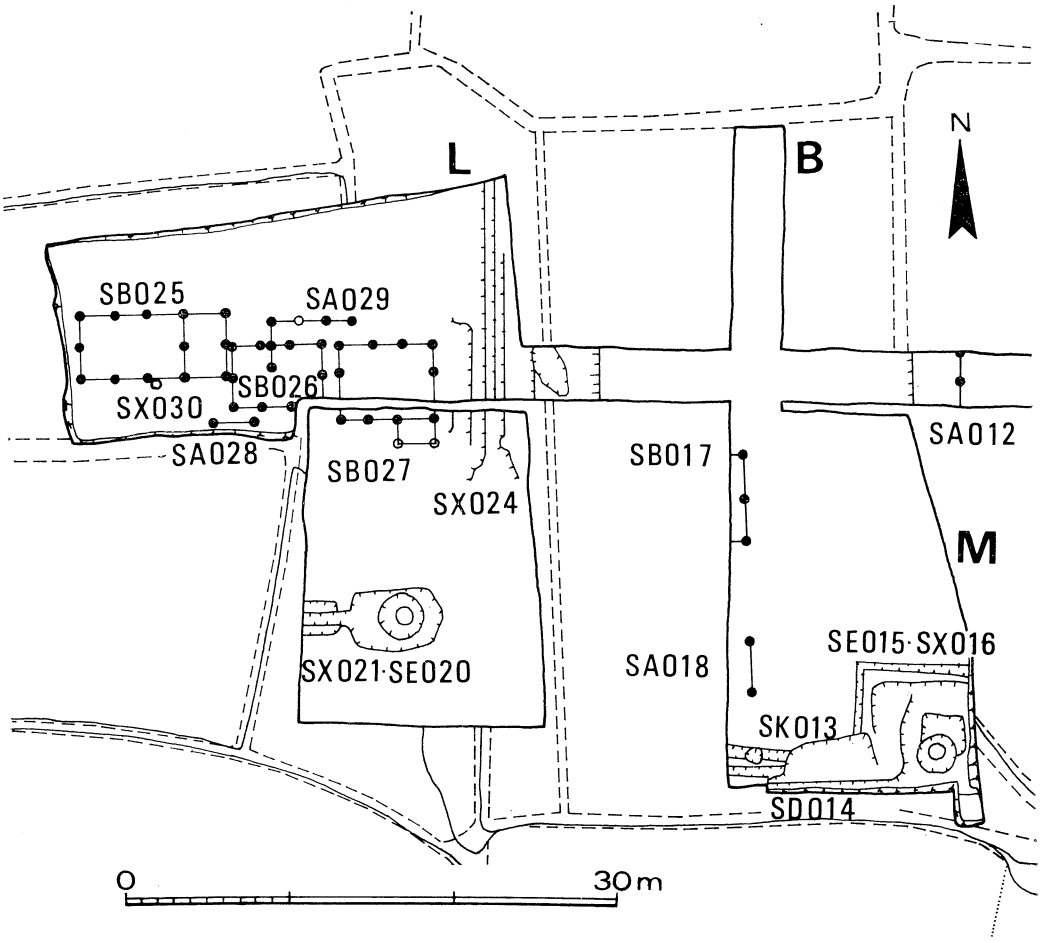
そのほかAトレンチで南北1間（約2m）の柱列SA012、Fトレンチで東西1間（約3m）の柱列SA042を検出した。なお、宅地として最適地であるSE015を中心とした高台からは1棟の建物を検出したのみであった。しかし遺構面が現地表から20〜30cmと浅く、後世の開墾によって中心部が削平された可能性が強い。遺物が高台の西斜面から二次堆積で多量に出土することからも裏づけられよう。




**第4図**　F・Gトレンチ遺構図

**建物の年代**　建物は前述したようにA、Bの２期に区分されるが、建物の存続年代を明らかにする遺物はいずれの柱掘形からも出土していない。しかし、建物周辺から出土する土器は平城宮Ⅰ期（710年頃）から平城宮Ⅲ期（750年頃）のものであり、建物に付設した井戸ＳＥ020の廃絶期を示す土器もⅢ期のものである。これらの事実から、その存続年代は、平城京造営とともにはじまり８世紀後半にはすでに居住空間としての機能を失なったものと考えられる。また、ＳＢ025に接して検出された蔵骨器は建物が廃絶した８世紀後半に埋納されたものであろう。

**宅地割り**　三坪は東南から中心部に向って谷が入りくんだ起伏のある地形となっている。こうした地形的な制約のため建物は主に坪の北半部にみられ、谷を南に見渡して建てられている。建物は大きく２つの地域に分れる。すなわち、L、Gトレンチを含む標高77ｍ前後の谷頭のゆるやかな傾斜地と、その東に階段状遺構ＳＸ024を境としてひろがるA、B、Mトレンチを含む標高80ｍ前後の平坦地の２地域で、それぞれに井戸ＳＥ015とＳＥ020をもつ。階段状遺構ＳＸ024は坪の東西心にあり、また南北心を境として宅地と谷筋に分れる。したがって、地形的な制約を受けながらも、大まかな宅地割りとして¼町以下で一つのまとまりを持つ傾向があるといえよう。




**第５図**　A·B·L·Mトレンチ遺構図

## 3　井　戸（第６図、図版６）

台地上のＭトレンチで方形の階段状遺構ＳＸ016を伴う井戸ＳＥ015と、この地区より１段低い谷頭のＬトレンチでＳＥ020とその付属施設ＳＸ021を検出した。

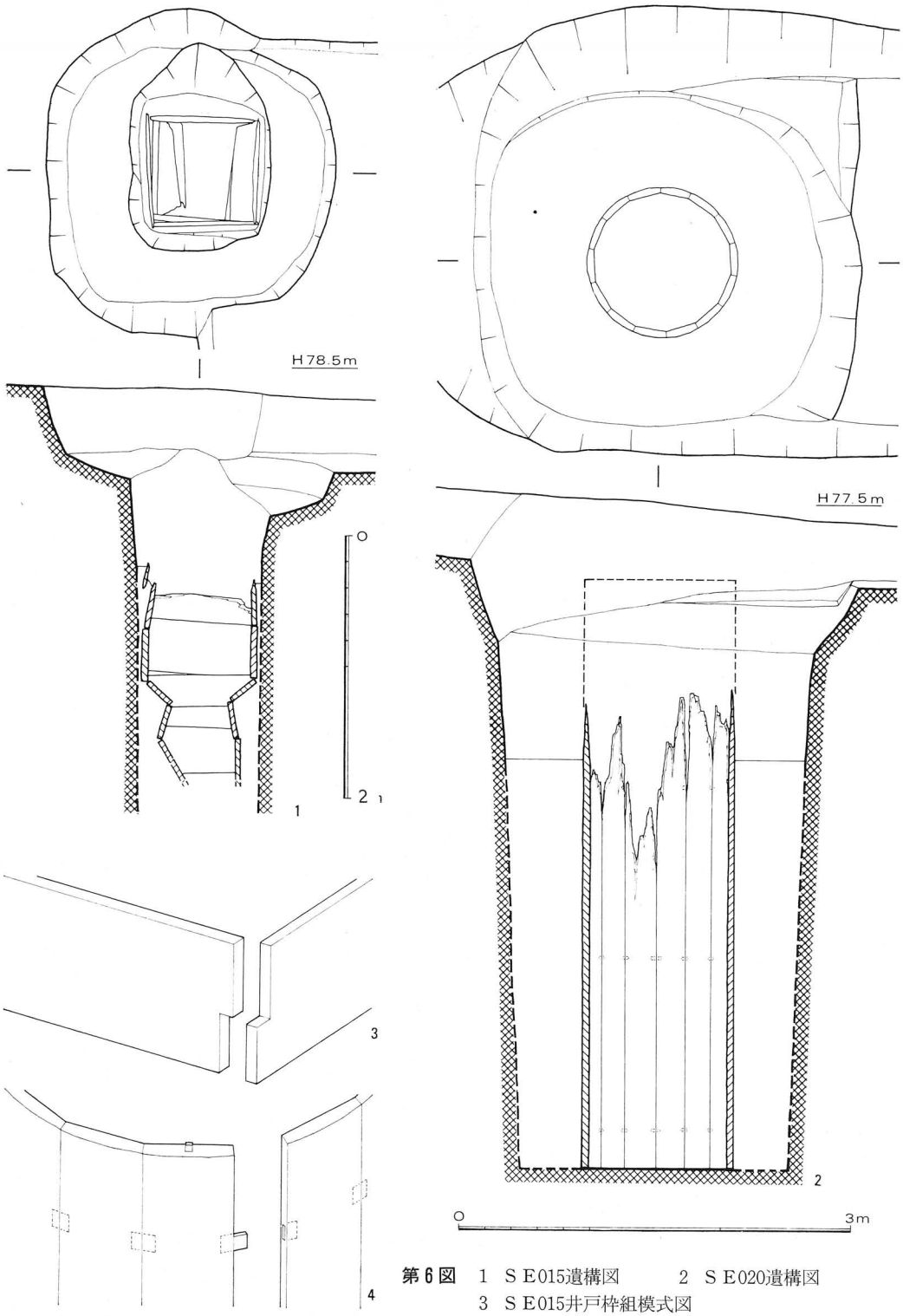
**ＳＥ015・ＳＸ016**　ＳＥ015は一辺0.8ｍの井籠組の井戸である（１）。枠板は長さ90cm、厚さ５cmで、材の対角になる二隅を切り落して仕口とする（３）。材の幅は各段で異なり28cm～40cmで、６段目まで確認した。掘形は２段につくられ、上段が一辺2.1ｍの隅丸方形、下段が一辺1.1ｍの不整方形である。井戸の深さは上段の掘形から約３ｍまで確認したが、それ以下については、検出時に崩壊したため、細部は不明である。

ＳＸ016は、ＳＥ015の周囲を四段に掘込んだ遺構である。井戸を深く掘り下げるために階段掘りした結果であろうが、井戸構築後は、最下段を埋戻して洗場とし、上三段に周溝を掘り、井戸に降りる際の階段として整備したものと考えられる。南西部は土壙ＳＫ013、ＳＤ014によって破壊され南側は未検出であるが、全体のプランを復原すると次のようになる。計４段に掘込んだ第１段目は一辺8.6ｍの正方形となり、深さ0.6ｍである。第２段は第１段の底の周囲0.6ｍ～0.8ｍの平坦面を残して掘込んでいる。一辺6.4ｍの正方形となり、深さ0.4ｍである。第３段は第２段の東部に片寄せて掘込む。長さ6.7ｍ、幅４～4.8ｍの長方形となり、深さ0.5ｍである。以上の３段には壁ぎわに沿って幅0.1～0.2ｍの溝が巡っている。第４段は第３段のほぼ中央を掘込んでいる。一辺2.8ｍの正方形となり、深さ0.5ｍである。井戸の掘形はこの最下段の掘込みの南部を切り込んで設けられており、ＳＸ016の中心から東南方向に1.4ｍずれた位置にある。

ＳＥ015から出土した遺物は少ないが、ＳＸ016からはかなりの量の土器が出土した。これらの遺物及び遺構の状態からみて、ＳＥ015・ＳＸ016は構築後比較的早い段階で崩壊し、廃棄されたようである。その時期は、遺物から８世紀前半と考えられる。

**ＳＥ020・ＳＸ021**　ＳＥ020は径1.1ｍの円形縦板組の井戸である（２）。井戸枠は、幅28cm、厚さ６cmの細長板材14枚を縦に組んでおり、各板は上中下の３箇所を雇枘で固定する。枠材は円形に組むために両側辺を鋭角につくり、外面を中高に削り曲面にしている。枠材の高さは2.6～4.1ｍであるが、井戸内には同工の板材が計６枚落込んでいた。残長1.1～1.9ｍで、木口から25cmの位置に枘孔がある。この板材を転落した井戸枠の上部とすると枘穴の間隔から、高さ4.5ｍに復原できる。また６枚のうち２枚には木口面に幅２cmの枘がある。おそらく円形の井戸枠の上に方形の枠を組み、それを４箇所で固定した枘であろう（４）。なお落込んだ板材の１枚には外面上部に「木」の刻字があった。掘形は２段になり、上段は長辺5.4ｍ、短辺3.2ｍの不整な長方形で下段は一辺2.5ｍの隅丸方形である。井戸の深さは、掘形上面から約5.1ｍである。

ＳＸ021は、ＳＥ020の上段の掘形内にある長さ1.5ｍ、幅3.2ｍの平坦面と谷側に向って下降する幅0.3ｍの溝状遺構である。これらはプランからも埋没の状況からもＳＥ020と併存するものであり、井戸に付属する洗場とその排水溝と考えられる。この洗場は井戸枠上端と推定した位置からわずか10cm低いのみであるが、方形の上枠が考えられるので井戸枠との比高差は充分であろう。ＳＥ020・ＳＸ021からは、土師器、須恵器のほか若干の木製品が出土した。これらの遺物から、ＳＥ020・ＳＸ021の廃絶の時期は８世紀中頃と考えられる。




**第6図**　1　ＳＥ015遺構図　　2　ＳＥ020遺構図
3　ＳＥ015井戸枠組模式図
4　ＳＥ020井戸枠組模式図